



|              |                                                                             |
|--------------|-----------------------------------------------------------------------------|
| Title        | 東京大学大学院 医学系研究科 国際保健学専攻                                                      |
| Author(s)    | 神馬, 征峰                                                                      |
| Citation     | 目で見るWHO. 2022, 82, p. 16-17                                                 |
| Version Type | VoR                                                                         |
| URL          | <a href="https://doi.org/10.18910/89917">https://doi.org/10.18910/89917</a> |
| rights       |                                                                             |
| Note         |                                                                             |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 東京大学大学院 医学系研究科 国際保健学専攻

## 日本初の国際保健学専門課程

本専攻は日本で初めての「国際保健学」教育・研究組織です。1992年、東京大学医学系研究科の中に設立され、その際に作成された案内文の冒頭には以下の文があります。

「本専攻の目的は、わたくしたち自身、そしてわたくしたちの子孫の『健康な生存』を目指して、その目的のために地球上のどこであれ必要とされる地域や機関で働く人々を養成することである。その研究主題は、地球上でわたくしたちの健康な生存を可能にするための、国際協力に基づく効果的方法の探求にある。さらに本専攻は、世界の目的を同じくする研究者、活動家や組織が交流し、情報交換を行い、共同プロジェクトを動かし、相互に支援するヒューマン・ネットワーク拠点でもある」

この目的達成のため、1992年初年度は、基幹講座である「国際保健計画学」、「国際地域保健学」、「人類遺伝学」分野を希望する学生を対象とした入学試験がなされ、その後協力3講座である「人類生態学」、「母子保健学」、「保健栄養学」分野も学生を募集するようになりました。現在はいくつかの教室名が変わり、合わせて10教室が本専攻内で活動しています (<http://www.sih.m.u-tokyo.ac.jp/> 参照)。10教室は大きく分けて国際社会医学講座(2教室)、国際生物医科学講座(4教室)、協力講座(4教室)に属しています。



東京大学大学院医学系研究科国際保健学専攻  
専攻長

神馬 征峰

1985年、浜松医大卒。飛騨高山赤十字病院、国立公衆衛生院、ハーバード大学、ガザ地区・ヨルダン川西岸地区WHO事務所長、「JICAネパール学校・地域保健プロジェクト」チームリーダー。再度ハーバード大学を経て2002年より東京大学。

本専攻が発足してから、今なお根づいている特色は以下の3つです。

- 1) 主要な講義やセミナーの共通言語は英語とします。
- 2) 「健康な生存」は、たんにその地域のみならず多くの他地域をもまきこんだ社会的事象です・・・その達成のための本専攻の研究は・・・国際的なプロジェクト研究を主体とします。
- 3) 学生に対する教育は寺子屋での手作り方式(実用的な個別教育)で行います。

このような特色を生かしつつ、学生は、本専攻特有の2種類の空気のなかで研究活動を進めていきます。

## 研究せざるをえない 空気のなかで

本専攻は、修士課程は2年、博士課程は3年。修士課程を卒業すると健康科学修士(Master of Health Science: MHSc)、博士課程を卒業すると保健学博士(PhD., Doctor of Health Science)



ラオス・ボンサリー県山岳民族の村でのマラリア調査



オーストラリアCurtin大学のBruce Maycock教授によるインタラクティブな講義



ネパールでの寄生虫対策

を手にすることができます。

本専攻に入るやいなや、多くの学生は、ごく自然に、ある一つの決意をすることになります。

「ここにきたからには国際ジャーナルに論文投稿しなくてはならない」という決意です。「そのような決意を迫られる」暗黙の空気、あるいは研究環境を本専攻は作りあげてきました。

本専攻のすべての教室にこのことは共通しています。学生全体の半数以上が留学生であることから、通常の学生同士の日常会話は英語です。わずかの例外を除き、すべての学生は修士論文、博士論文をすべて英語で作成し、多くが国際ジャーナルへの投稿を目指します。講義で学べることには限界があるため、学生には独自の研究を遂行してもらい、個々の研究完成のための個人指導を徹底的に行っています。ほとんどの学生が人生で初めての論文執筆に取り組むわけですから、中には50回から100回程度の論文修正集中ノックを受ける人もいます。論文執筆に十分時間をとってもらうためには、長期のフィールドワークはむしろマイナスです。できるだけ短期間でデータを集め、データ分析に時間をかけ、研究結果

を人々の声として論文にまとめ、いかに世界にそれを届けるか、そこに力をいれています。

中には修士課程1年や博士課程1年の時期にWHO・UNICEFなどでインターンする学生もいます。日本の企業によるインターンに参加する留学生もいます。いずれの場合も、原則自力で応募してもらいます。そこに至るプロセスそのものがよい経験となります。

## 自由な空気の中かで

国際保健の現場で伸びてくる教え子たちを見ていることがあります。名の通った教育機関で学んできた人が必ずしも国際保健分野で活躍できるというわけではありません。むしろ、自分で独自にプログラムを組んで、あえて海外に出たり、医学部をでたあと経済学や経営学を学んだり。そうやって既存の枠にはまらない教育環境を自分自身で作りあげられるような人こそ、将来イノベティブな活動ができるのではないかと、このことです。

冒頭に紹介したように、「本専攻は、世界の目的を同じくする研究者、活動家や組織が交流し、情報交換を行い、共同

プロジェクトを動かし、相互に支援するヒューマン・ネットワーク拠点でもある」ということを強調しています。国際経験豊富なスタッフの指導によってそのことを自ら経験し、かつネットワークを独自に築きあげていく力をつけていくことが重要です。

そのためには厳しすぎるカリキュラムはよくありません。講義指導を受けつつも、いかに自力で学び取ってもらうか。そこが大事です。そうやって自由に羽ばたいていける、緩やかな環境づくりこそが、学生の将来の飛躍につながります。ただし、これは私見であり、必ずしも他の教室の教授が同じ意見ではないでしょう。少なくとも国際社会医学講座においては、こうした環境を本専攻の伝統として残していきたいと考えております。我こそは、という方はぜひ、本専攻の門をたたいてください。

東京大学大学院・医学系研究科・国際保健学専攻の連絡先：

以下にいけば、各教室の連絡先がわかります。

<http://www.sih.m.u-tokyo.ac.jp/>